公益社団法人日本都市計画学会 都市計画報告集 No.10, 2012 年 2 月
*Reports of the City Planning Institute of Japan, No.10, February, 2012*

# 一本釣り漁師の共同体に関する調査研究～和歌山県田辺市江川を事例として～

# A Study on the community of pole and line fishermen : A Case Study of Egawa, Tanabe City, Wakayama Prefecture

椎本浩和*・落合知帆**
Hirokazu Shiimoto*・Chiho Ochiai**

In Egawa , a traditional fishermen's village, fishermen do pole and line fishing inherited from ancient times. That number accounts for about 60% of the total. The purpose of this study is to understand how fishermen's community has been developed. First, as a result of the basic survey of life of fishermen, the fishermen's community at the time of fishing changes the group and size to reduce the risk of accidents and financial risks. Second, by examining the fishermen's festival which is closely related the living of fishermen, it revealed that close ties of fishermen's community is developed in the festival by spend time and working together that share a common consciousness. The festival helps to maintain the unity/community of fishermen. Finally, in order to understand and analyze the fishermen's community in depth, investigated the privately owned warehouse of fisherman. As a result, not only the fishermen but also his classmate and friends can gather in the warehouse, and consult fishing and their lives that makes linkage. The warehouse is a symbolic place of the fishermen's community.

*Keywords*: Community, fishermen, Festival, Warehouse
共同体、漁師、祭り、納屋

## 1. 序論

### 1-1. 研究の背景

和歌山県田辺市江川は古くから行われている一本釣り漁 [1)]を行う漁師が多い町である。日本では漁業の効率化が図られ、各地で漁船の大型化が進む中 [2)]で、この地域の漁師はその時代の流れと異なり、自分の手で魚を釣るという一本釣り漁が、経営体数の約6割を占めている[3)]。漁師は、日々変化する自然を相手に生業を営んでおり、『板子一枚下は地獄』に象徴されるように、常に命の危険にさらされている。このため、漁師はまとまりが強い [4)]と言われている。彼らはどのように、自らの生業においてリスクを回避するために協力関係を結び、また、陸（オカ）においても人間関係を形成し、維持してきたのだろうか。今日、共同体が見直されている中で、伝統的な漁村において、その共同体の原型がどのように構築されてきたのかを明らかにすることが重要である。

### 1-2. 研究の目的

本研究では、和歌山県南漁協田辺本部に所属する一本釣り漁師に対する聞き取り調査・観察を行い、1）生業の実態と漁における協力やまとまりを把握するため、出漁中および漁港でのやり取りを調査した。2）生業と関わりの深い伝統的な漁師の祭りに着目し、漁師の共同体にとっての祭りの役割を明らかにした。また、それらを通して見られた漁師と地域とのつながりをより深く理解をするために、3）個人所有の納屋（なや）の物理的変化やしつらえ・利用を観察し、漁師の人間関係や活動内容を分析し、一本釣り漁師の共同体について考察を行った。

### 1-3. 研究方法・調査

本研究では質的調査方法であるマイクロ・エスノグラフィーを参考に、漁師の行動観察と聞き取り調査を行った [5)]。そして、観察・聞き取り調査で不明な点が生じれば、何度も観察・聞き取り調査を繰り返し得られたデータを基に分析を行った。また、港や納屋における空間的な把握も試みた。

調査期間は、2011 年 1 月から 2012 年 1 月にかけて各 4～5 日間実施し、計 6 回、合計 27 日間である。調査内容は漁師の行動観察・生活に関する聞き取り調査・漁の同行、漁師の祭りの観察とし、延べ 28 人に対して行った[注1)]。

### 1-3. 既往研究と本論文の関わり

共同体を対象とした研究には、生業と共同体の関わり [4)]、祭りと共同体の関わり [6)]、場と共同体への役割[7)]、しつらえから見る共同体への関わり [8)]などがある。しかし、生業と祭りといった漁師の日常と非日常の双方をとらえ、また個人所有の納屋における漁師の共同体について考察した研究は見当たらない。

## 2. 調査対象地

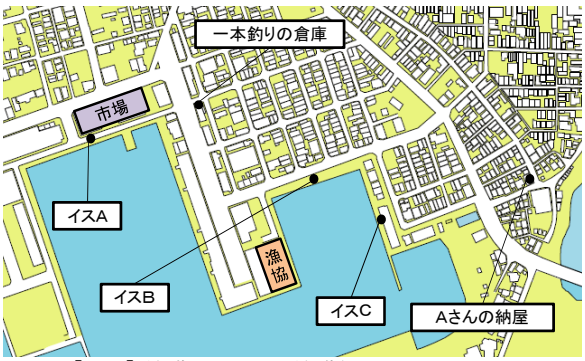
調査対象地である和歌山県田辺市江川地区は、合津側の右岸に位置する漁師町であり、昔からの江川町と、昭和 38 年の埋め立てによって出来た漁港を中心とした江川枡潟町が合併した地区であり、この辺り一帯は江川と呼ばれている。和歌山南漁協田辺本部はこの地区の中に位置している。

## 3. 生業を通した共同体の形成

### 3-1. 漁および漁港での観察結果

イサギ漁に、朝 5 時～11 時まで同行し、漁の様子や、出港前後の他の漁師とのやりとりを記録し、漁港での観察を行った結果、漁師たちは出港前、漁の最中、帰港後において、「直接話す」または「無線で話す」など、常時漁師仲間と連絡を取り合っていた。また、（図-1）に示すように、漁港付近の数か所において、漁師の集まりが確認できた。各場所では、船の停泊位置という理由だけでなく、年齢の近い漁師達同士が集まっていた。

*非会員・京都大学大学院工学研究科建築学専攻 （Dept. of Architecture, Graduate School of Eng., Kyoto University）
**会員・京都大学地球環境学堂 （Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University）




【図-1】漁港で見られた漁港付近のまとまりの場所

### 3-2. 生業を通じた漁師の共同体

漁という生業を通じた漁師のに関して、以下のようなまとまりを確認することができた。

(1) 漁師という職業でのまとまり

漁師という職業がまとまりの大枠としてある。その上で、自然を相手にする職業であり命の危険にさらされた時に助けてもらわなければならないという生業の特性から、漁に出た際はお互いの安全確認を無線で行い、何かあればお互いが助け合うといったように、漁の最中は漁師全体でのまとまりがある。

そして、漁の最中・漁の前後では漁の相談や、釣果の確認といったお互いの漁が向上するような話をしている。これは、漁場の相談や、釣果の確認に加え、リスク管理の側面もあった。

(2) 年齢層などでの集まりの違い

その上で、漁師の中でも同級生など年齢層が近い者同士のまとまりがある。年齢が近いものどうしが漁港にイスを置き、話し合っている。世代が交代することで、船を着ける場所も変わり、このため、同世代のまとまりが出来ることが分かった。また、ほとんど全ての漁師は、昔から江川で共に育っており、幼少時からの関係が現在のまとまりに影響している事が確認できた。

(3) 漁の違いでのまとまりの違い

漁種によっても、イサギ漁やカツオ漁といったように、まとまりの違いがある。比較的近海で操業するイサギ漁と少し沖に出るカツオ漁では、そのまとまりは異なる。カツオ漁では、一つの魚群を一人で取りきることが難しく、どこに魚群があるのかを話しあい、同じ魚群をともに釣ることで、近年高騰する燃料費を抑えて魚を釣ることが出来、経済的なリスクの低減に寄与している。そして、沖に出るカツオ漁の場合は、沖に出ると漁での危険度もより高くなり、海上で近くに漁船がいない場合もあるため、「モヤイ船」といって 2、3 隻の船で共に漁に出ることで漁の効率化を図り、また事故のリスクを軽減する工夫を行っている。

このように生業を営む上で漁師共同体は異なるまとまりがあり、それぞれに多様な機能を有している。

## 4. 祭りでの共同体の形成

次に漁師にとって大切な日である祭りを取り上げ、祭りにおける共同体について述べる。

### 4-1. 新年の祭りの概要

江川では、海の神様である「八大龍王」を祀る龍宮祭と言われる祭りがある。漁師が海の幸を一方的に殺生しているからその恩恵に対して神様に感謝する為と、大漁祈願と安全祈願の為に行われる。この祭りは毎年 1 月 12・13 日に行われるが、11 日は準備をし 14 日は片づけをする為、実質 4 日間のお祭りである。この 4 日間は漁には行かない取り決めになっており、みんなで新年を祝う。

### 4-2. 新年の祭りで見られる集団行動と共同の機会

漁師の生活での非日常的な機会として、新年の祭りである龍宮祭の観察を行った。祭りにおける 1) 神を祭る空間の設営と、2) 祭りでの集団行動、の 2 点から新年の祭りでの共同体を分析し、図 2 に示す。

(1) 神を祭る空間の設営

祭りの準備ではまず、祈祷を行い、漁村センター内を清め神様を呼べる状態にし、浦安神社から掛け軸や神様の像を取り祭壇を作り、神を祭る空間へとしつらえる。供物も伝統的に決められたものを厳格に供える。このように、神様を祭る為に漁村センターという普段は使われていない元々の福利厚生施設を厳密にしつらえることによって、特別な神を祭る空間を設営している。

(2) 祭りでの集団行動

新年の祭りでは「なおらい」が開かれ、祝宴と交流の場が設けられ、漁師は日々の漁に対して大漁祈願・安全祈願を行う。漁師は祭りの期間漁を休み、祭りの準備や片づけを全員で行い、獅子まわしを共に見て江川で伝承されてきた伊勢節を共に歌い、祭りを楽しむ。こういった行動を通して、漁師は共通の時間を過ごし共通の意識を共有することで、漁師のまとまりが生まれ維持されている。そして、漁村センターと浦安神社を往復する際に、昔からの決まりごとを守り、江川地区内を水・塩を巻き、太鼓や笛を鳴らしながら細い道を全員で行列をなして清め歩いたり、宿老の家々の前では、獅子をまわし新年の祭りを地域住民と共に楽しむことを通して、地域住民と漁師とのつながりも生まれている。

(3) 漁師がまとまる機会

祭りの設営、行列して清め歩く、獅子まわし行うといった祭りでの集団行動が、漁師達は共同によって行われ、昔からの伝統として今日まで継承されてきている。その一方で、漁師の人数が減少し祭りの資金がかかることもあり、元々は漁師の家が「御宿」を担っていたのが、その負担を減らす為に、漁村センターで行われるようになった。さらに、一本釣り・巻き網船の乗組員・青年団がそれぞれに御宿があり、神様を祀っていたのが漁村センターにおいて合同で祝うように変わり、仲買人の祭りは行われなくなるなど、時代の経過とともに祭りの内容が変化している。しかし、そういった変化に伴い一本釣り漁師のみならず、巻き網船団の乗組員や若手など、これまでの階級を越え、漁師全体で集まる機会へと変わってきている。また、近隣の漁師と合同の一本釣り組合会が設立されたことにより、祭りでは食事をし、話し合い、意見交換するなどの機会が持たれるようにな

り、より大きな漁師のまとまりへと変化している。

このようにして漁師が定期的に一堂に会する場が持たれていることで、普段は話すことが少ない漁師間で話す機会が増え、その結果、漁師がまとまるきっかけを作り、共通の時間を過ごし、共通の意識を共有することで、漁師共同体の結束が作られ、また維持されているといえる。

## 5. 納屋を通して見る漁師の共同体

漁師の関係や地域とのつながりをより深く理解するために、個人所有の納屋を取り上げ、物理的事象であるしつらえを通して観察し、そこにおける人間関係や活動内容を考察する。

### 5-1. 納屋の概要

一本釣り組合会会長の A 氏（64 歳）の納屋は、もともとは漁具倉庫であった。15 年ほど前に A 氏が巻き網漁師から一本釣り漁師へと変わった際に、父親から受け継ぎ、古くなっていたのを倉庫として利用するために建て替えた。倉庫の手前半分はコンクリート床で奥は漁具が保管できるような木製の棚が備え付けられていた。A 氏が次第にそこで寝泊まりするようになり、家族への気兼ねがないために、漁師仲間や友人たちが集まるようになっていった。現在では、A 氏を中心として、様々な人々が一日の多くまたは少しの時間を過ごす場となっている。

### 5-2. 日常と祭りにおける納屋の空間変化

納屋のしつらえを調査し、日常・祭りでの空間の使われ方から空間を分類した(図 3)。日常における納屋では、漁師という仲間の中にも、親類、同級生、友人など多様な人間関係があり、納屋での共同体が形成されていた。また、祭りにおいては、日常では集まらない人も加わり、日常のくつろぎの空間がより多くの人々を招きいれるために拡張され、もてなしの空間へ変化していた(図 3､4)。

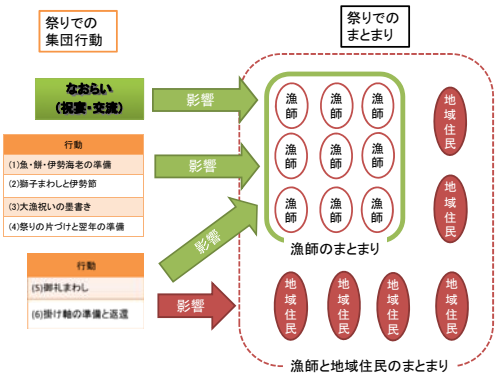
### 5-3 納屋における漁師の関係と納屋の役割

納屋における日常と非日常のしつらえから、納屋における漁師関係について考察した。

(1) 納屋の変遷と人との関わり

A 氏が巻き網漁師から一本釣り漁師へと変わり、一本釣り組合会会長になるといったように人との関わり方が変化する中で、元々は単なる漁具倉庫であった納屋は、徐々に改築されその使われ方を変えてきた。そして、人の集まりやすい空間へと納屋はその役割を変えていった。

【写真-1】龍宮祭りでの漁師の行列の様子



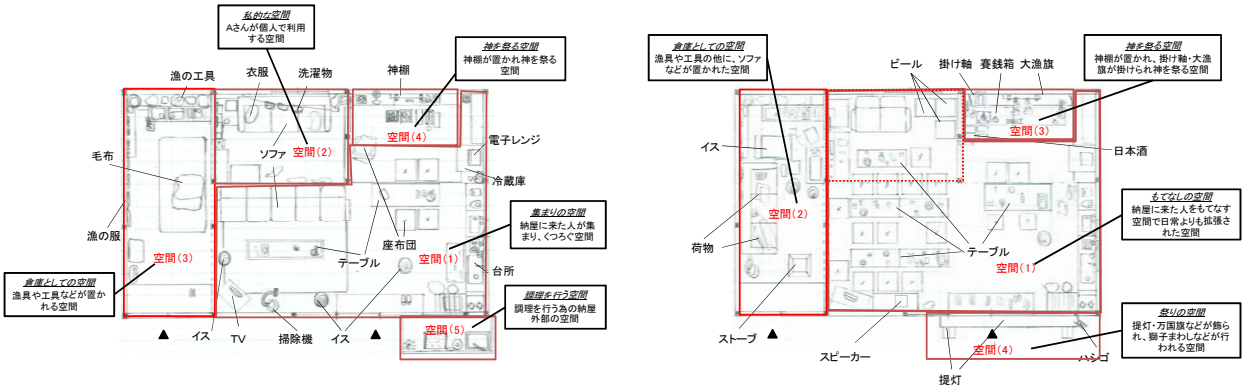

【図-2】祭りでの集団行動とその影響

(2) 日常のA氏を中心とした共同体の形成

A 氏の納屋には、そもそもの機能である倉庫としての機能があり、人が集まるにつれて、納屋の使われ方は変化していき、今では納屋を訪れた人がくつろげるような空間が作られている。こういった人が集まりやすい空間があり、年齢や職業などが違っても同じ空間で過ごすことが出来、納屋を介して A 氏を中心とした納屋でのまとまりが出来ている。

(3) 祭りを通じたより大きな共同体の形成

A 氏の納屋では、祭りの際にしつらえを変えることで空間の利用の仕方を変えていた。祭りという非日常的な機会であり神様の前であるから厳格に場をしつらえ、より多くの人を迎えることが出来るように、支度する。その結果、個人の空間や調理空間などの日常生活で重要な空間は無くなるが、より多くの人が集まることが出来るようにもてなしの空間を拡張していた。また、祭りの際は、納屋に入らずとも漁師以外の地域の人たちが納屋での獅子まわしを見に来ていた。そこで、共に新年の祭




【図-3】A氏の納屋の空間分類と納屋での様子(左：日常　右：祭り)

りを祝う。このように、祭りという機会を通して、A 氏を中心とした納屋でのまとまりは、地域住民を含めたより大きなまとまりとなっている。

(4) 漁師共同体の象徴的な場としての納屋

納屋では、お互いがくつろぎ交流し相談をしたり、次のリーダーの指導をしたり、文句を言いながらも見捨てず互いの関係を良好にしたり、日々思っていることを祭りにおいて本音でぶつかったりと漁師共同体の多面性が見て取れた。そして、納屋という場所で見られた共同体は、親類、同級生、漁業関係者（漁師以外）といった多様な関係に加え、年齢も異なる様々な人が訪れ、時によってその大きさや形や関係を変える。このようにして、A 氏の納屋が、漁師共同体の象徴的な場となっている。

## 6. 結論

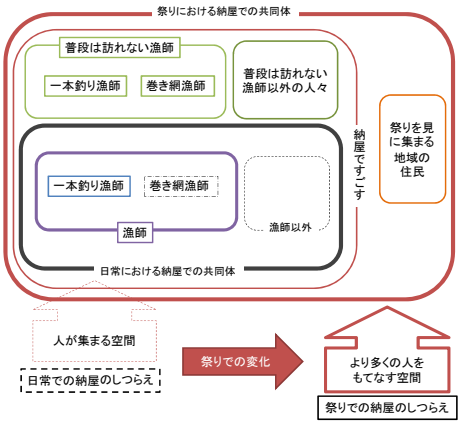
本研究では、和歌山県田辺市江川の伝統的な一本釣り漁を行う一本釣り漁師について注目し、一本釣り漁師の共同体について明らかにすることを目的とした。そして一本釣り漁師の共同体を以下のように結論付ける。

1．一本釣り漁師の人数が減少し、漁獲量が減り漁獲金額が安くなる中で、周辺地域の一本釣り漁師と連携を取り、一本釣り組合会を設立し一本釣り漁師全体でまとまろうとしているのが明らかになった。まとまることで団体交渉権を得ることができ、一本釣り漁師の意見を通しやすくしたり、獅子まわしや祭りの準備の人手が、若手を含み得られ、協力して祭りの準備・維持が出来ることが明らかになった。

2．漁師はその年齢や漁の違いなどから、それぞれの漁師にまとまりがある。まとまりに違いはあれども、漁師という自然を相手にする職業が常に命の危険にさらされている。漁に出た際は何かあればお互いが助け合い、無線で連絡を取りあい漁の前後で話し合うことで、経済的なリスクや事故のリスクが低減しその危険に立ち向かっているのが分かった。

3．祭りの際は、漁師は神様への感謝を表し、日々の大漁祈願・安全祈願を行う。全員で神様を祭る空間を厳格にしつらえ、神様との祝宴と交流が図られ、獅子まわしを共に見て江川で伝承されてきた伊勢節を共に歌い、街中を共に歩き、顔に大漁祈願の為に墨で文字を書くなどし、同じ時間を過ごしながら、日々の生活や漁の話をしながら祭りを楽しむ。漁師は祭りという共通の時間を過ごし、共通の意識を共有することで、漁師の共同体の結束を維持していることが明らかになった。そして、祭りが一本釣り漁師と巻き網漁師の連携や、伝統を継承する機会となっていることが明らかになった。

4．日常と非日常で利用されていた一本釣り組合会会長である漁師 A 氏の納屋では、徐々にその使われ方が変化した。人が集まりやすい空間がつくられ、年齢や職業などが違っても仲間が集まり同じ空間で過ごすことが出来る。その結果、納屋を介してAさんを中心とした納屋でのまとまりが出来ている。祭りの際は厳格に場をしつらえ、多くの人にとってより集まりやすい場所へと変えることで、普段は集まらない人もこの納屋に集まり、新年の祭りを祝う場にその役割を変えていた。そして、納屋に集まることで、交流が生まれ、漁や生活の相談ができ、違う漁種の漁師ともつながることができる。このように、A 氏の納屋が漁師共同体の象徴的な場となっていた。




【図-4】祭りにおける納屋での共同体

以上より、江川の一本釣り漁師のまとまりは、その都度その形や大きさを変え、祭りなどの場合は、巻き網の漁師や、漁師以外の人、地域の住民に至るまで、一本釣り漁師のまとまりだけにとどまらないことが分かった。また、漁師の共同体は、漁での経済的なリスクや事故リスクを軽減し、漁業や祭りといった漁師文化や伝統の継承し、人との関係を作り、生活や交渉事など相談することでの問題解決など、様々な機能を持ち合わせているのが分かった。

**【用語の定義】**

- 漁師[9]…漁業協同組合に所属し漁業権を持ち漁を行い生活する職業。
- 一本釣り漁[10]…釣糸と釣針を用いて魚を捕獲する漁。竿を用いる方法と、竿を用いずに釣糸を手に取る方法がある。
- 巻き網漁[10]…網を用いて魚を包囲し、漁獲する漁
- 共同体[11]…自然条件や血縁関係などを原始的な共同形態として持った共同組織のこと。
- 江川…1962 年に埋め立てできた「江川枡潟町」と埋め立て前からある「江川町」を合わせて呼ぶ総称。
-

**【補注】**

28 人の内、一本釣り 20 人（江川 13 人、戎 1 人、芳養 3 人、目良 3 人）

**【参考文献】**

1) 田村栄(1973 年)，「江川漁業史」，田辺漁業協同組合
2) 川島秀一(2005 年)，「カツオ漁」，法政大学出版局
3) 和歌山県田辺市役所(2010 年)，「漁業」，和歌山県田辺市役所
4) 地井昭夫(1975 年)，「漁業集落の研究とその方法についての考察（漁村計画の方法に関する基礎研究・その 1)」，日本建築学会論文報告集 237 号，PP. 135-145
5) 箕浦康子(1999 年)，「フィールドワークの技法と実際―マイクロ・エスノグラフィー入門―」，ミネルヴァ書房，
6) 新谷 雅樹，他(1990 年)，「祭を通した共同体の形成に関する研究」，日本建築学会近畿支部研究報告集計画系 30 号，693-696
7) 中村 敏宏(2010 年)，「日本の都市再生に関する基礎研究 1―海岸線の変遷から読み解く 島原船津・漁師町の空間構造とコミュニティー形成―」，学術講演梗概集 F-2 号，371-372
8) 田中 康裕(2007 年)，「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察―「ひがしまち街角広場」を対象として―」，日本建築学会計画系論文集 620 号，103-110，
9) 水産庁(1949 年)，「漁業権」，昭和 24 年
10) 金田禎之(2005 年)，「日本漁具・漁法図説」，成山堂書店
11) 大塚久雄(2000 年)「共同体の基礎理論」，岩波書店